



# 社会実装を推進し、科学技術イノベーションを実現 産官学の連携によってSociety 5.0の未来へ

## 須藤 亮

株式会社東芝 特別嘱託  
内閣府政策参与・プログラム統括

科学技術イノベーションの実現を目指して設立された「戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)」。2018年から始まった第2期は4年目を迎え、2022年度末の目標達成に向けた研究開発とその先にある研究開発成果の社会実装への取り組みがすすめられています。産官学が連携し、多様な課題を推し進めるSIPの現在と今後の展望について、須藤 亮プログラム統括にお話を伺いました。

### 产官学が連携し、 一気通貫でSociety 5.0を築く

Q- はじめにSIPの特徴を教えてください。

須藤プログラム統括 - SIPは、府省庁にまたがる横断的分野において、基礎から実用化・事業化までを見据えて、一気通貫で、産官学が連携して研究開発を進めるところが特徴です。そのため取り組む課題は、企業単体では解決することが難しいものとなっており、企業間、関係省庁、あるいは、アカデミアとの連携が欠かせません。このように、SIPは、日本全体の力を結集して進めることができるプログラムであることから、産業界からも大きな期待を集めていると思っています。私自身、第1期では産業界側からSIPにかかり、このSIPを高く評価しておりました。

SIPはSociety 5.0の実現に向けた取り組みであり、サイバー空間とフィジカル空間の融合化技術の開発やさまざまな社会課題を解決するための研究開発、社会実装を目指しています。

### SIP第2期 2022年が最終年度

Q- SIP第2期の進捗はいかがでしょうか。

須藤プログラム統括 - SIP第2期がスタートした年は、ちょうど第1期が最終年度で1年間重なっていたため、連携などに苦慮した面がありました。その後、課題ごとにグローバルベンチマークをしっかりと行い、自分たちのやるべきことを明確にして、それをもとに研究計画を立案して推進してきました。3年半を経て、どの課題も技術的な成果が出てきていると考えています。残りの期間で、これらの成果を社会実装を目指す取り組みを進めています。

### 第6期基本計画 総合知の活用による社会実装へ

Q-2021年に閣議決定された第6期科学技術・イノベーション基本計画(以下、基本計画)では「総合知の活用による社会実装」が盛り込まれました。SIPはどのように変わりますか。

須藤プログラム統括 - 「総合知の活用による社会実装」が基本計画に盛り込まれたことにより、SIPの目的である社会実装のプロセスがより明確になったと思います。これまでのSIPの取り組みでは、技術志向が強く、技術的成果が得られた事例が多い一方で、それらを社会実装するための具体策の検討については十分ではない面もありました。これからSIPは、総合知を活用し、技術と人文・社会系の知見を合わせ、「本当にその技術が世の中のためになるのかどうか」「いかに世の中に受容してもらえるか」といったことをさまざまな角度から分析し、技術的成果の社会実装を進めていくことになります。

研究開発は基礎から応用へと進んでいくため、社会実装に至るまでは一定期間が必要であり、その期間は課題によって異なります。そのためSIPでは、課題ごとにロードマップをきちんと描き、年度ごとに評価を行い、その評価を受けて研究開発計画の見直しを行いながら社会実装を目指していきます。

### 次期SIPの検討も開始

須藤プログラム統括 - 次期のSIPについて議論を始めています。制度そのものについて、第1期・第2期を振り返り、より実行的・効率的なやり方がないかを検討するとともに、具体的な各課題についても検討を始めています。各府省庁、アカデミア、産業界から数多くの課題候補が上がっており、それらを我々で取りまとめてガバニングボードに諮り、課題を決定していきます。